

前立腺への転移が認められた犬の膀胱移行上皮癌の 1 例

○宇野健治 うの動物病院

はじめに

犬の膀胱腫瘍は、全腫瘍中の 1%にも満たないが、その中で悪性上皮性腫瘍、特に移行上皮癌の発生率は高い。今回、診断時すでに前立腺への転移が認められた膀胱原発の移行上皮癌に遭遇し、外科的処置ならびに化学療法を実施したのでその概要を報告する。

症 例

ビーグル犬、オス、9 歳 7 カ月齢、体重 17.1kg。数日前から元気食欲はあるものの排尿時間が長く血尿。便の性状は普通だが、排便時間が長く回数も多いとの稟告にて来院。5 カ月前に膀胱炎となったが、抗生剤・消炎剤等の治療により治癒していた。初診時の尿沈渣の細胞診において、核異型性の強い大小不同の円形細胞を多数認めた。血液検査所見では、ALT、ALP の上昇がみられたが腎機能に異常は認められなかった。X 線検査では、排泄性尿路造影において腎臓、尿管に通過障害はなかったが、膀胱粘膜面に径 1 cm 前後の充影欠損像が散見された。超音波検査においても、膀胱内に高エコーのポリープ状腫瘍が認められた。以上の諸検査から、膀胱悪性腫瘍を疑い開腹手術を実施した。開腹すると、膀胱漿膜面に肉眼的異常は認められなかったが、粘膜面には、膀胱三角部から体部腹側を中心にポリープ状腫瘍と微細腫瘍が散見された。ポリープ状腫瘍は漿膜面を含めて摘出し、微細腫瘍は粘膜下織までの切除と焼烙を行った。尿路変更を伴う全膀胱切除は行わなかった。また、前立腺の腫大・硬結が認められたため、術中に細胞診を行ったところ、多数の大型異型上皮様細胞が確認され、悪性上皮性腫瘍が示唆された。摘出困難と判断し、バイオプシーのみ行い閉腹した。摘出した膀胱病変部の病理組織所見は、いわゆるグレードⅢの浸潤性移行上皮癌であり、前立腺組織内には、その転移像を示唆する移行上皮癌の浸潤が認められた。TNM 分類で T₃N_xM₀ と考えられ根治の可能性が低いと判断されたため、QOL を得るため化学療法を実施した。プロトコールは、アドリアマイシンとマイトマイシン C の膀胱内注入を 1 週間に 1 回、アドリアマイシンの点滴静注を 4 週間に 1 回、また免疫療法としてピロキシカムの 1 日 1 回の経口投与を基本に実施した。しかしながら、術後第 59 病日呼吸困難となり第 61 病日自宅にて死亡した。

考 察

今回の症例は、確定診断時すでに前立腺への転移が認められた膀胱移行上皮癌の症例であった。本例の外科的アプローチの場合、尿路変更を伴う全膀胱切除および前立腺全摘出手術も考えられたが、術後の合併症が多いとされていることから部分切除法を選択した。また今回実施した化学療法も、進行した浸潤性の膀胱移行上皮癌に対して効果は不確実であった。膀胱癌の生存期間を有意に改善するには、やはり早期発見・早期診断・早期治療が必要と考えられた。